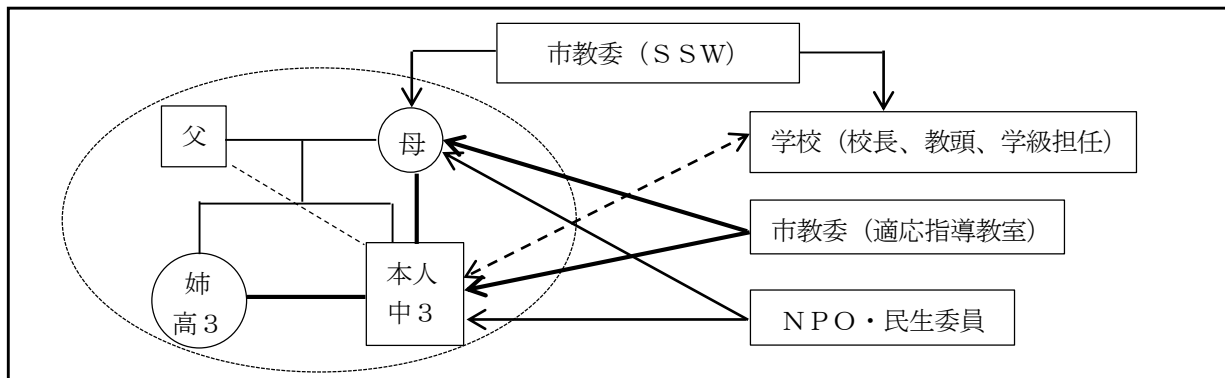


学習に対する意欲を向上させたケース



1 気になる状況

- 当該生徒（中学校第3学年男子）は、中学校に入学した際、他の小学校から来た生徒と友人関係をつくることができなかった。
- 当該生徒は、入学して間もなく、体格のことでからかわれたことなどが原因で、登校することに不安を感じるようになり、第1学年5月から不登校傾向となる。
- 当該生徒は、第1学年の8月までは1か月に2、3日の回数で別室登校をしていたが、9月から不登校となった。
- 当該生徒は、第2学年の10月から適応指導教室へは通級するようになった。
- 当該生徒の保護者は学校に不信感をもっており、学級担任による家庭訪問等の接触を拒否しているため、他の教員による訪問や、ファクシミリと郵便により連絡をとっている。
- 当該生徒は、学習への意欲がほとんどない。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該生徒は、母親を信頼しており、姉（高等学校第3学年）とも仲が良く、姉が勉強を教えることがある。
- 当該生徒は、父親の厳しさを嫌っており、同じ場所にいることに辛さを感じていた。その父親が、大きなけがで自宅療養している期間が長く、当該生徒の不登校期間と重なる時期があった。
- 母親は、当該生徒の気持ちを最優先に考え、父親と一緒にいる時間を少なくし、少しでも外出の機会を増やすため、適応指導教室の利用を考えた。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWが学校訪問を行い、校長・教頭・学級担任と次のことを確認したこと。
 - ・ 同じ学校の生徒に会うことに不安感があり、学校に行くことができないこと。
 - ・ 学級担任との接触を極端に嫌い、学校に足を向けることができないこと。
 - ・ 不登校状態が続いているため、学習への意欲が低下していること。
 - ・ 適応指導教室には、母親が送迎できる日に、月に5日程度、通級していること。適応指導教室で把握した情報は、学校に伝え、共通理解を図っていること。
 - ・ 学習意欲が低下しているため、適応指導教室への通級当初は、学習から離れて遊びやゲームを主にした活動を行うこと。その中で適応指導教室に慣れさせ、当該生徒の状態を見極めて学習に取り組むようにすること。
- 学校（校長、教頭、学級担任）とSSWで、ケース会議を開催し、情報を共有している。

3 ケース会議の状況

- これまで、2回のケース会議を開催した。
 - <参加者>学校（校長・教頭・学級担任）、SSW
 - <協議内容>①適応指導教室での状況 ②母親と当該生徒の考え ③適応指導教室の方針

4 プランニング

- 学級担任や当該中学校の他の生徒など、学校に対する恐れが非常に強いことから、適応指導教室通級開始後しばらくの期間、学校に関する話題は、必要最小限に留める。
- 学習意欲がとても低く、学習に関する話題になると辛そうな表情をしたことから、遊びやゲームを主にした活動とする。
- 人との会話や意思表示も苦手なため、遊びやゲームをとおして、意思表示をする場面を設定する。
- 学習については、当該生徒が取り組みそうなことから始め、その後は、興味をもちそうな教科から苦手教科へと広げる。
- 人との交流が苦手なことから、NPOや民生委員との交流の場を活用する。
- 意欲の向上に向けて自信をもたせることが重要になるため、「成長の可能性が見えた時」「できなかったことができた時」を当該生徒に示し、当該生徒の成長を認める。
- 母親との絆が強く、影響が大きいことから、当該生徒の変化を母親に伝え、母親に希望をもたせる。

遊び・ゲームによる居場所づくり

興味をもちそうな学習から取り組む

小さな成長を、当該生徒・母親に伝え、喜びを感じてもらう

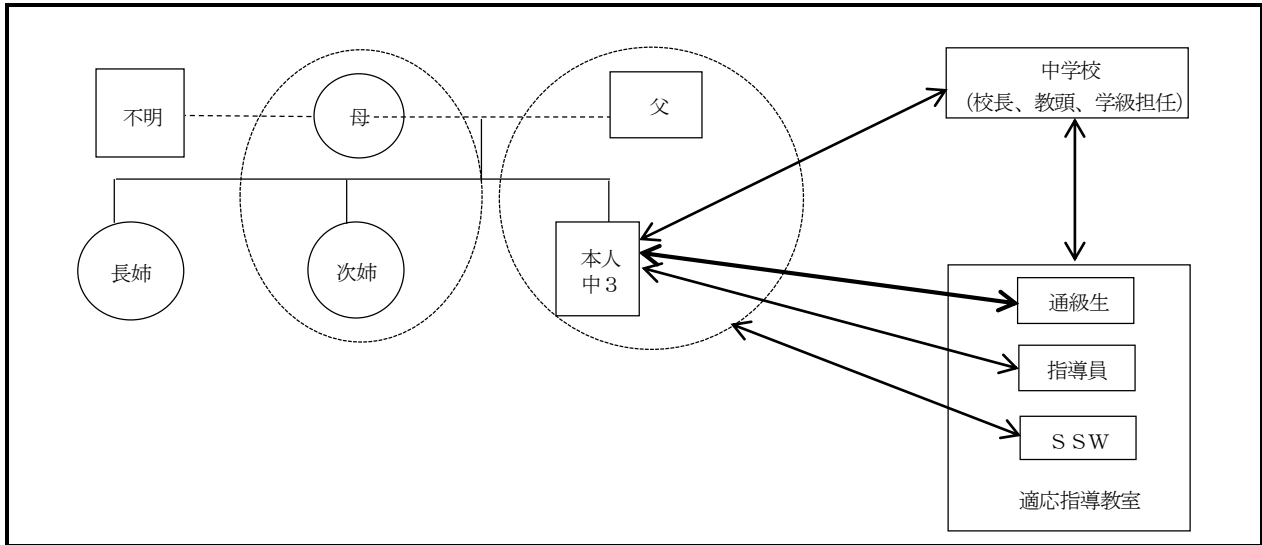
5 関係機関との連携

- 適応指導教室
 - ・ 日常の努力や変化に目を向け、努力したことやわずかな向上も当該生徒に告げて自信をもたせるとともに、学習意欲を喚起し、学習時間や教科の範囲を拡大した。
 - ・ 自己表現や自己主張する機会が極めて少ないことから、ゲームや遊びをとおして他の生徒と交流する場を設定する。
- 中学校
 - ・ 当該生徒と保護者は極端に学校を避けるため、学校が積極的に関わることは困難な状態である。そのため、適応指導教室の様子や、当該生徒と保護者の希望をS S Wが学校に伝えた。また、学校の考えや意図をS S Wが当該生徒と母親に伝えた。
- N P O
 - ・ S S Wから保護者に、当該生徒が外へ出ることの大切さを伝えたことから、保護者はN P Oが開催する行事に、当該生徒を参加させた。また、N P O職員は、適応指導教室の活動にも一部参加し、当該生徒と交流する場をもった。
- 民生委員
 - ・ 毎週、当該生徒が参加している農園活動に参加し、当該生徒に声をかけている。当該生徒にとって他人と交流する重要な機会となっている。
 - ・ 当該生徒と保護者が学級担任との接触を嫌っていることから、学級担任とS S Wが連携を図り、当該生徒・保護者の様子や要望を学級担任に伝えるとともに、学級担任の要望を伝えている。また、進路にかかわって、三者懇談を学校で実施することが困難なことから、適応指導教室を活用できるようにした。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

- 成果
 - ・ 当初、適応指導教室への通級は月5、6日だったが、当該生徒の希望によりバスを利用するようになって毎日通級できるようになった。
 - ・ 当初、質問しても辛そうな表情をするだけであったが、頷いたり、首を振ったり、簡単な言葉で返事をするようになった。同時に、非常に嫌がっていた教科の学習の種類も広がり、学習時間も伸びるようになった。
 - ・ 当初、人間関係を新たに構築することを極端に拒否していたが、N P O行事に参加するようになり、触れ合う大人の範囲が広がった。
- 課題
 - ・ 学級担任等との接触を嫌い、学校的话题を拒むことが多かったため、進路にかかわる三者懇談は適応指導教室での実施となった。

進路実現に向けた適応指導教室の利用



1 気になる状況

- 当該生徒（中学校第3学年男子）は、中学校第1学年の9月から体調不良や友人関係のトラブルを理由として不登校状態であった。
- 当該生徒は、中学校第1学年の冬季休業明けに、学級担任の紹介で適応指導教室を見学し、SSWに相談することとなった。
- 当該生徒は、友人に対しての拒否感が強く、中学校への登校は難しい様子であったため、SSWは適応指導教室への通級を勧めたが、引きこもりの状態が続いた。
- 第2学年の時は、父親への依存が強く、進路について考えることができない状態であったが、第3学年の進級時に、父親から適応指導教室に通級の申し出があった。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 当該生徒は、適応指導教室に通級する以前は「自分はいつ死んでもいい」との発言をし、将来に希望をもつことができない様子であった。
- 当該生徒は、適応指導教室に通級するようになってからは、進学について話すなど未来のことについても考えられるようになった。
- 当該生徒は、一度拒否的に感じると、そのこととのかかわりを絶とうとしてしまい、引きこもる傾向が見られる。
- 当該生徒は、勝ち負けや損得で物事を判断する傾向があり、他罰的である。
- 当該生徒の両親は、幼い頃に離婚し、当該生徒は父親と生活し、2名の姉は母親と生活した。現在、次姉は母親と暮らしているが、長姉は他県へ移り住んでいる。
- 父親はSSWとの面談の中で、母親を悪く言う場面が見られ、当該生徒の前でも母親について悪く言っている様子が見られた。
- 父親は当該生徒を「本人はこういう性格なので」と言って、甘やかす傾向にある。
- 姉弟の仲が良く、互いの家を行き来することがある。その際、当該生徒は母親とも顔を合わせていたが、中学校第3学年への進級前に母親との間でトラブルがあったと考えられ、それ以降は顔を合わせていない様子である。
- 学級担任は週1回程度家庭訪問をし、当該生徒と面談している。学級担任は、当該生徒の状況に配慮して強い登校刺激は行っていない。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学級担任が当該生徒に適応指導教室を紹介した際に、SSWが当該生徒の家庭環境や学校での様子について家庭や学校から情報を収集した。
- 適応指導教室に通級する直前に、学校（校長、教頭、学級担任）、学校コーディネーター、SSWで、ケース会議を開催し、情報を共有した。
- 適応指導教室に通級するようになってからは、月1回の状況報告、また当該生徒の様子に変化があった際に、随時、情報共有を行った。

3 ケース会議の状況

- 適応指導教室に通級する直前に、ケース会議を開催した。
＜参加者＞学校（校長、教頭、学級担任）、学校コーディネーター、SSW
＜協議内容＞①当該生徒や家庭の状況の把握
②今後の支援方針

SSWが適応指導教室に配置されている利点を生かし、毎日の様子の変化を見守り、その都度本人に対して直接支援を行った。また、本人の性格に配慮して学校と適応指導教室の両方を拒否することにならないよう、引きこもりの防止に努めた。

4 プランニング

- 適応指導教室では、当該生徒の生活習慣を整え、対人関係について学ばせたり、基礎学力の定着を図ったりした。また、当該生徒と保護者が進学を強く希望していることから、進路希望の実現に向けた支援を行う。
- 学級担任は学校と本人とのつながりを切らないよう、定期的な家庭訪問と適応指導教室への訪問を行い、登校刺激を行う。また、当該生徒が自分の進路希望に合った高校を適切に選択できるよう進路指導を行う。

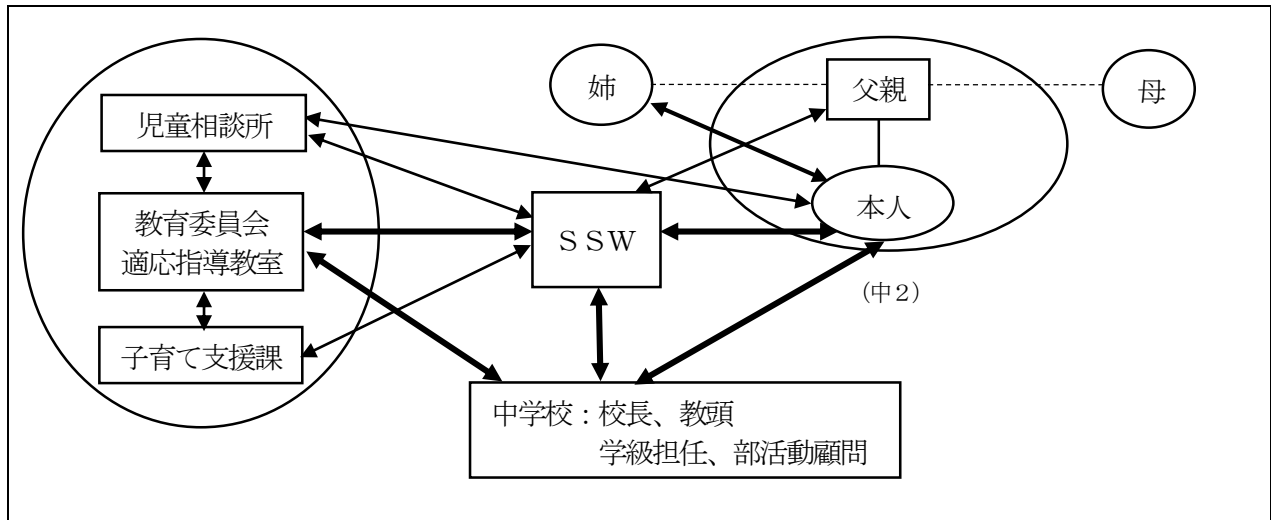
5 関係機関との連携

- SSWが適応指導教室に配置されているため、当該生徒の変化を注意深く見守り、適応指導教室の指導員ときめ細かく支援方針を確認しながら支援を行うことができた。
- 学校とは月1回の状況報告を中心に連絡体制をもち、登校刺激が当該生徒に効果がありそうと判断した際には、学校に情報提供し、当該生徒の後押しを依頼した。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

- 成果
 - ・ 当該生徒は、進路希望の実現に向けて、学習に力を入れるようになった。父親も進学について考えるようになり、当該生徒を塾に通わせることになった。着実に学力を付けた反面、学習に追われ、その他の生活がおろそかになる傾向が見られた。
 - ・ 適応指導教室に通級することで同年代の友だちができ、対人関係について学ぶ機会をもつことができた。
 - ・ 適応指導教室での生活に自信をもてるようになったが、高校受験への焦りが生まれた。学校の友だちが誘いかけたことをきっかけに、学校へ行くことを希望し、夏休み明けに2日間登校したが続かず、適応指導教室に復帰した。
 - ・ 適応指導教室への再通級が決まった時には落ち着いた様子であり、復帰に失敗したという課題は残ったが、適応指導教室が本人の帰る場として機能したという成果も見られた。
 - ・ 学級担任の進路指導により、希望と現実のそれぞれを考慮できるようになり、本人に適していると考えられる高校を受験することができた。
- 課題
 - ・ 適応指導教室への通級を始めてから、柔軟な対応ができるようになったが、まだ、損得や勝ち負けで判断する場面は見られる。課題解決能力に乏しく、今後、壁にぶつかった際に、対処することができず、引きこもりとなる可能性がある。

学校・関係機関との連携により不登校の改善を図ったケース



1 気になる状況

- 中学校第1学年の3学期に、部活動におけるトラブルが原因で欠席が増えだした。
- 中学校第2学年に進級後、体調不良を訴えて早退することが多くなり、不登校となる。
- 学級担任が家庭訪問をしても不在がちで、連絡もつかないことが多い。
- 父子家庭であり、父親は仕事の都合で早朝に出勤し、深夜に帰宅する日が多く、当該生徒とかかわる時間が少ない。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 小学校時代の当該生徒は、明朗な性格で、委員会活動に積極的に参加したり、スポーツ少年団で活発に活動したりするなど意欲的に学校生活を過ごしていた。
- 当該生徒は、両親の離婚により小学校を転校した頃に、休みがちになった。
- 当該生徒は、父親から生活費をもらっているため自由に使用できる金銭がある。
- 中学校第2学年に進級後、家出をし、友人宅に泊まるなど外泊する傾向が見られるようになってきた。
- 父親は、仕事が忙しく、家のことや当該生徒の養育については手が回っていない。
- 当該生徒が体調を崩した際は、姉が病院へ連れて行くなど当該生徒の面倒を見ている。
- 父親は、学校の教職員と直接会うことを避けがちであるが、電話連絡には応じている。

(2) 学校との情報共有の状況

- SSWは、管理職や学級担任と連絡を取り、当該生徒や家庭の状況等について情報共有を図った。
- SSWは、当該生徒宅を訪問したり、当該生徒と連絡を取ったりした場合、保護者の同意を得て、その内容を学校に情報提供した。その際、保護者や当該生徒の学校への要望も伝えるようにした。

3 ケース会議の状況

- 参加者：学校（校長、学級担任）、警察署（少年係）、児童相談所（児童福祉司）、子育て支援課、教育委員会（指導主事、SSW）
- 内容：当該生徒の現状の情報共有と共通理解

4 プランニング

- 支援の方向性
 - ・ 自己有用感を高めることにより当該生徒の精神的安定を図り、自宅から登校するように働きかける。
 - ・ 当該生徒は、学級担任に対し信頼感があることから、連絡を密にすることを通して、当該生徒が孤立感を感じることがないようにする。
- SSW
 - ・ 学校との連絡を密にし、当該生徒の動向など情報を共有し、必要に応じてケース会議をコーディネートする。
 - ・ 当該生徒に対し、民生委員や児童相談所職員からも連絡をとることを通して、安心感を与えるようにする。
- 学校
 - ・ 校長、教頭、養護教諭、部活動の顧問等により支援体制を構築し、当該生徒への働きかけを強化する。
 - ・ 学級担任を中心に、家庭訪問や電話連絡等により当該生徒とのつながりを維持・強化していく。
 - ・ 教室に入ることを急がせず、保健室や会議室等、当該生徒が登校しやすいように居場所をつくる。
 - ・ 当該生徒が得意とする運動やダンスを話題として取り上げ、登校意欲を高めていく。

SSWが、当該生徒の興味関心のあることや小学校時代の長所を把握した上で、自己有用感をもたせることの必要性を学校に働きかけた結果、指導方針が改善され、当該生徒の登校意欲につながった。

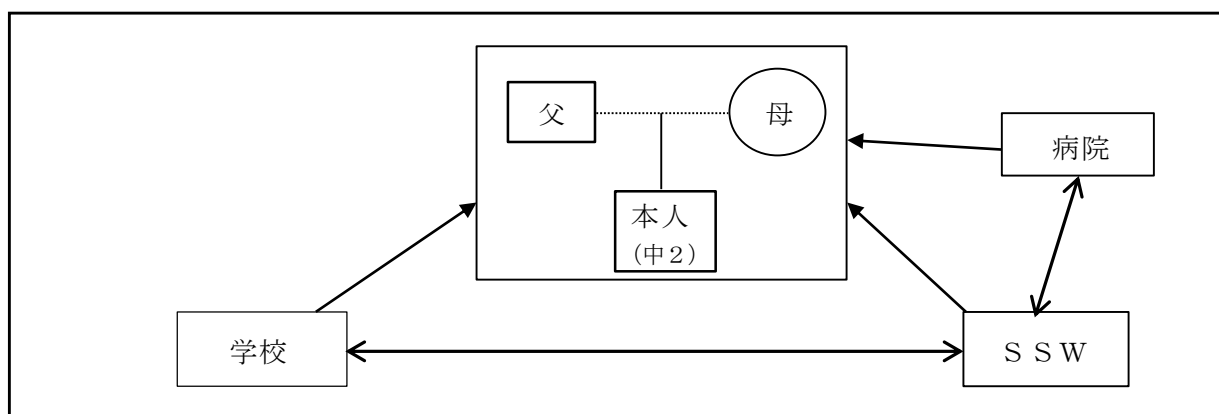
5 関係機関との連携

- 民生児童委員・児童相談所
 - ・ 家庭訪問を行い、家庭の状況を把握することで、当該生徒や父親が孤立感を抱かないように働きかけを強化する。
 - ・ 家出が繰り返されるようであれば、児童相談所に一時保護を要請することも検討する。
- 教育委員会
 - ・ SSWは、不登校の改善のステップとして、適応指導教室の活用について学校に働きかけていく。
- 小学校
 - ・ SSWは、当該生徒が前向きな生活を送っていた小学校時代の様子を聞き取り、学校に情報提供する。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

- 成果
 - ・ SSWは、小学校時代の当該生徒の様子を踏まえ、当該生徒が中学校の部活動に参加できるよう顧問からの働きかけを依頼した。その結果、当該生徒は、部活動に参加するようになり、登校への意欲につながった。
 - ・ SSWは、父親に対して、当該生徒のよさを積極的に伝えることを通して、学校への関心を高めるよう努めた。その結果、父親は、学校からの連絡に応じるようになり、子どもとかわる時間を少しずつもつようになった。
 - ・ SSWが中心となり、ケース会議を開催したことにより、関係機関がそれぞれの役割を明確にしながら不登校の生徒への対応を行うというモデルができた。
- 課題
 - ・ 父親の養育上の課題は、十分な解消が図られていないことから、当該生徒が家庭で落ち着いて生活できる親子関係づくりに向け、支援をしていく必要がある。
 - ・ 部活動への参加をきっかけに、学級においても、他の生徒との良好な人間関係をつくることのできるよう配慮していく必要がある。

学校・家庭と連携を図りながら、登校支援により不登校の改善を図ったケース



1 気になる状況

- 当該生徒は小学校時に不登校の状況は見られなかったが、中学校進学後、仲が良かった生徒が引っ越した頃から、欠席が多くなった。
- 無欠席の月がなく、2学期後半から徐々に欠席が増加した。
- 学校ではSCと母親の面談を行ったが、改善が見られなかった。
- 両親は不仲であり、母親とSSWの二人だけの面談の際、母親は離婚を考えていると訴えていた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

- 両親共働きで経済的には安定している。
- 父親が知人に当該生徒のことを相談し、その知人からSSWに情報提供があった。
- 当該生徒は、理屈っぽいところがあり、学習や部活動など継続して行うことが苦手であるため、父親の反感を買う場面もあるが、一緒に遊んだり、外出したりしている。
- 当該生徒の友人関係は良好である。

(2) 学校との情報共有の状況

- 学級担任との情報交流は、SSWが学校訪問した際や電話で行い、学級担任が不在の場合は、教頭と行った。
- 学校は、校内支援委員会の中で情報を共有し、管理職や学級担任以外の職員も含めて指導方針や対応について検討している。

3 ケース会議の状況

- ケース会議には、学級担任が必ず参加することとし、ケース会議後に実施する校内支援委員会には、SSWが参加して指導方針等について一緒に検討した。

<ケース会議のメンバー>

- ・ 教頭、学年主任、学級担任、SSW（場合によって両親も参加）（3回）
- ・ SC、母親、学級担任、SSW（3回）
- ・ 医師、臨床心理士、母親、学級担任・SSW（2回）

4 プランニング

- 当該生徒の登校支援を行うとともに、母親との面談も行い、家庭や母親の安定を第一に対応する。
- 当該生徒に対しては、週に1回登校し、週の目標を学級担任と当該生徒で設定するなど、自力登校を目標にS S Wが登校支援に当たる。
- 学習の遅れを取り戻すため、放課後の学習室活用や家庭においては主体的に学習できるように促す。

当該生徒が置かれている周りの環境に働きかけることで、登校への意識が高まった。

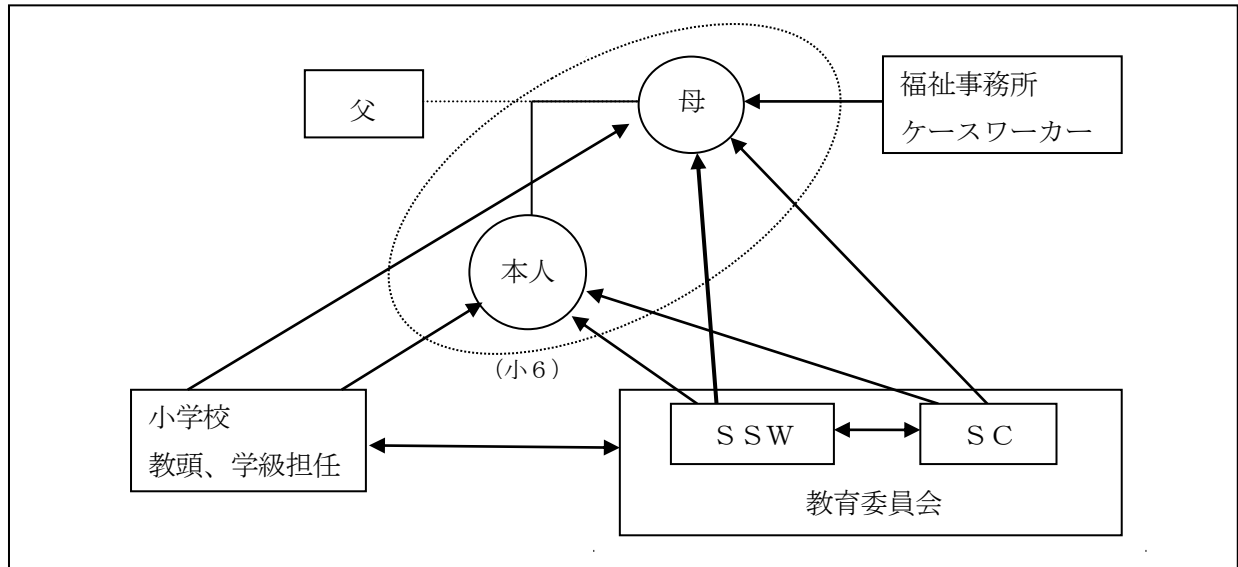
5 関係機関との連携

- 病院での検査を受け、医師からアドバイスを受ける。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

- 成果
 - (1) 当該生徒の変容
 - ・ 中学校1年時は、週1回の登校であったが、中学校2年の7月から、宿泊学習をきっかけに登校できるようになった。
 - ・ 学校行事があるときは朝から登校し、参加することができるまでに改善された。
 - (2) 保護者の変容
 - ・ 母親は、学級担任やS S Wの協力により、一人で悩みを抱えることがなくなり、夫婦の関係も修復され、明るい表情となった。
 - ・ 父親は、当該生徒と一緒に学習に取り組むようになるなど、当該生徒の登校改善に向け、協力的になった。
- 課題
 - ・ 当該生徒が自力で朝から登校することが目標であることから、毎日の登校支援を通して当該生徒の意識を変えていく必要がある。
 - ・ 当該生徒が登校した際の学級担任の言葉掛けやS Cとの面談等を今後も継続する必要がある。

学校、SCと連携しながら不登校の改善を図ったケース



1 気になる状況

- 当該児童は、夜中はパソコンの動画をずっと見ているなど、昼夜逆転の生活となっている。
- 母親が当該児童を注意すると興奮して暴れ出す。
- 洗髪の際、シャンプーを3回もつけて洗うなどのこだわりがある。
- 当該児童の欠席日数が増えてきたため、児童が小学校第5学年時に学校がSSWに相談してきた。

2 アセスメント

(1) 基本情報

<家庭環境>

- 両親の不和により、当該児童は母親と共に他管内から移住した。
- 母子二人暮らしで、生活保護を受給している。
- 母親は、当該児童の昼夜逆転の生活状況から体調がすぐれず、夜眠れない。

<当該児童の状況>

- 発語が遅く、4歳くらいから話すようになった。
- 身体を洗うことや清潔にすることに強いこだわりをもっている。
- 食事に関して、おいしいと感じたものは1～3か月の間、繰り返し食べる。
- 対人関係では、好き嫌いがはっきりしており、自分の気に入らない人とは話をしない。
- 自分が思ったことをすぐに口に出してしまうため、同年代の児童と人間関係をつくるのが困難な状況にある。
- 家庭内では、自分が思うようにならないことがあると暴れることがある。

<不登校の経過>

- クラス替えを機に、仲の良かった子と離れてから、学校を休みがちになった。
- 母親の仕事が早朝のため、当該児童の登校を見送ることができないことや、当該児

童の自宅から学校まで遠く、登校に時間がかかることも影響している。

- 母親は、状況の改善のため、SSWとの面談の中で、SCによるカウンセリングを希望したため、SSWはSCに連絡し、カウンセリングの予約を取り付けた。

(2) 学校との情報共有の状況

- 3月、SSWは学級担任と面談し、当該児童や家庭の状況を聞いた。
- 4月、学級担任が替わったため、同年5月に学級担任と面談して情報共有を行い、その後も学校訪問や電話を通じて、常に当該児童の様子を把握するようにしている。

3 ケース会議の状況

SCやSSWからの母親と本人へのカウンセリングを中心としたかわりをもった。

- 第1回ケース会議（6月）
 - ・出席者：学級担任、SC、SSW
 - ・当該児童がパソコンの動画に執着して夜中に起きているため、パソコンの扱いについて協議することを目的に、当該児童や家庭の状況について情報交換した。
- 第2回ケース会議（9月）
 - ・出席者：教頭、学級担任、SC、SSW
 - ・医療機関の受診結果をもとに、今後の方向性を協議した。

4 プランニング

- 学校
 - ・家庭訪問によるプリント類の配付、母子との面談。
- SC
 - ・月2回程度、母子のカウンセリング。
- SSW
 - ・家庭訪問による母子との面談。学校、SCと保護者間の調整。

5 関係機関との連携

- 医療機関
 - ・SCの勧めにより2回受診し、アスペルガー症候群と診断。
- 生活保護ケースワーカー
 - ・SSWが家庭訪問の状況を随時報告。

6 当該児童生徒の変容（成果と課題）

- 成果
 - ・不登校状態は続いているが、カウンセリングには通っており、SCとは話ができる。
 - ・医療機関の助言を受け、母親が当該児童に対する接し方を調整したことにより、当該児童が興奮することが少なくなった。
 - ・学校、SC、SSWの三者が連携を図ることで、相談体制が整っている。
- 課題
 - ・当該児童の昼夜逆転の生活が改善されず、登校のきっかけがつかめない。
 - ・諸検査から特別支援学級への在籍変更を検討する必要がある。